

---

# 魔王と一緒に

聖なる写真

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王王と一緒に

### 【Nコード】

N3681T

### 【作者名】

聖なる写真

### 【あらすじ】

黒き闇が満ちるとき、 “影” を帯びた “化け物” が生まれる……  
2つの脅威を携えた少女、 セラフィーナ・ダンロップ。 彼女は  
この王国で、 ただただ悪を狩り続ける……そう、 化け物ゆえに。  
不定期更新に変更しました。

## 1・化け物の少女(前書き)

まだ他のが完結していきなくせに投稿。  
安に頑張る予定。

こっちは週一投稿を目

## 1・化け物の少女

「はあ……はあ……くそっ！」

男は追われていた。とあるものに。

「ちくしょう……！　なんであんな……！」

追われる心当たりがないと言えば嘘になる。彼は盗賊なのだから。

盗賊といっても山賊や海賊のように傭兵や正規の軍隊を相手にしてきたわけではない。裏路地で無力な女性を狙っていたにすぎない小悪党であった。だから、自分がこんな目にあうなんて全く思いもしなかったらしい。彼の口からはブツブツと神への怨嗟が漏れる。

一方、彼を追う“影”は、彼と一定の距離をとりつつ、時折闇魔法で彼の方向を制限したりしている。その顔には笑みが。

「……ちい！　ファイヤーボール“火焰弾”！」

半ばやけくそで放った炎の玉。それは、影に当たる前に何かによって止められる。それは闇夜にまぎれてまったく見えなかったが、少なくとも影の体の一部ではなさそうだ。

「くそが……！　この化け物が！」

「ふん……同じようなやつは同じことしか言えないようだな」

影からまだ幼さが抜けない女性の声が聞こえる。しかし、彼はそれが当然のように舌打ちをする。

「くそっ……！ 神様の糞野郎！ なんで俺ばかりこん……！」  
その言葉を彼が呟くことは二度となかった。なぜなら、「闇」が彼の首を絞めていたからだ。

「なぜ自分ばかりこんな目に？」 簡単だろ」

影の言葉とともに、闇は彼の抵抗をあざ笑うように、首に力を入れる。

「“神”なんてこの世に存在しないからだ」

ゴキリ、と不吉な音がした。それと同時に、彼の体から力が抜ける。

闇はもう動くことのない彼を離すと、スルスルと音もなく影の足元に返る。

そして夜風が影を剥ぎ取り、月光は影の正体を闇夜に照らし出す。

そこには、まだ10代後半の少女が夜風にその銀色の髪を遊ばせている光景が移っているだけだった。

ランドール王国、モンドラゴン大陸中部一帯を占め、東は険しいドラゴネッティ山脈が立ちふさがり、西は大陸一の国家デューボルト帝国が控えている。そんなところにある、大陸二の大国。

そんなランドール王国の首都の中心に存在するランドール城、玉座の間。

ここは普段多くの家臣たちが集う場所であるのだが、今はわずかに3名しかいない。少女と青年と爺だ。

「お疲れ様、セフィー」

「……国王自らとは随分と腰が低い国だな」

「一応君は准将だからね。それに新しい仕事もあるし」

「……毎回ながら本当にふざけてるな。休む暇ぐらいよこせ」  
「ハハハ」

笑ってる場合じゃないだろ、と先ほどの少女があきれながら呟く。

彼女の名前はセラフィーナ・ダンロップ。さきほどの“影”の正体だ。

銀色の髪を肩まで切りそろえ、全身を黒衣で纏うその姿は、可憐で神聖な聖職者に見えなくもないが、皮肉にも彼女の周りを見下したような表情がそのイメージを一蹴する。そして、玉座に座り、セラフィーナ以後、愛称のセフィーで呼ばせてもらおうと親しげに会話しているこの男。皆さんの予想通り、この国“ランドール王国”の国王、レオナルド・ランドール・キングストンである。輝かんばかりの黄金の髪、高貴な立場が漂う凛々しい顔立ち、洗練された服の着こなし方。まるで、物語の王子様が現実に現れたような、そんな錯覚を抱きかねな

い。

無論、その顔も優しさが溢れんばかりである。

「陛下もセフィーも元気そうでこの老体には羨ましい限りです。今度、 “若さの秘訣” などありましたら教えていただきたいですな」

程よく整えられた顎髭をいじりながら、 老人が楽しそうに呟く。  
この老人についてはまたあとで。

「……そろそろ本題に移ろうか」

「ああ、 次は何だ？ 下らない小物相手はさすがに飽きた」

真剣な表情になったレオナルドに対し、 大してその立ち振る舞いを変えようとしないセフィー。 そんな彼女に慣れているのか、 レオナルドは中に多量の書類が入っているであろう、 封筒を差し出す。

「……なるほどな」

しばらく、 パラパラと書類を流し読みて、 だいたいの内容を理解するセフィー。 書類内には「魔薬」「常用者」「学園」などの文字が書かれている。

「で？ 私にどうしろと？ 言っておくが、 私のことは世界中に広まっているぞ。 “闇の超魔導”…… “化け物”として」

さて、 話を区切るようで申し訳ないが、 ここでセフィーの “異常な能力” と魔法についてある程度解説をしておこう。

“闇の超魔導”それが彼女の異常な能力の一つ。 カッコよくい

つてみれば“魂が闇に染まったもの”ということ、魔力が常人の数倍に膨れ上がり、魔力が常に闇属性を帯びているのだ。

闇属性に関しては敵無し。普通に魔法を撃ち合っても十中八九負けない。その代わり、他の属性の魔法に関してはカス以下という両極端な能力なのだ。

ついでに“闇の超魔導”というからには一応、他の属性の超魔導もあることを明記しておく。

どうやら、「魔薬」の出所を探るか、「魔薬」所持者を見つけるために、「学園」に潜入するらしいが、先程の言のようにセフィーはその実力で世界中にその名を轟かせている。彼女に潜入捜査は不可能だろう。

そんな彼女の不安を知ってか、爺が口を出す。

「大丈夫じゃよセラフィーナ殿。もうすでに潜入捜査は別の者がやっておる。貴女にやってほしいのは、“陽動”じゃよ」

「陽動？ …… ああ、なるほど」

爺の言葉に一瞬眉をしかめたセフィーだが、すぐにその意図を読みとると、納得がいったように頷いた。

「念のため確認するが……私は“なにもしなくていい”んだな？」

「ああ、“なにもしなくていい”んじゃよ」

安心したように呟く老人。それを一度だけ見た後、セフィーはレオナルドに向き直る。

「じゃあ、いつからだ？」

「来週だ。転入手続きはこっちで整えてもらってから、12時までに学園長室に行ってくれ」

「了解つと」

そんな会話をしたあと、セフィーは闇の中に溶けた。  
そんな光景を見た2人は、やれやれとため息に似たなにかを口  
からはいた。

1 化け物の少女（後書き）

6 / 16 闇の超魔道についての解説を追加。

## 2・英雄と化物（前書き）

うえーい。何とか間に合いました。

出来はひどいかな！

## 2・英雄と化物

「……ったく、なんでこんなにデカイ門を拵えたんだ」

経費の無駄じゃねえかと、ぶつくさ呟くのは、銀の髪を肩まで切りそろえた少女、セラフィーナ・ダンロップである。一応、彼女が経費とかの心配をする立場ではないことをここに言及しておく。

「さて、学園長室は「まちなさい！」？」

もらった地図で、学園長室の居場所を探そうとするセフィーに、突如声が降りそそぐ。面倒だなと思いつつ振り返れば、そこには数人の男女が1人の少女を囲っており、それを1人の少女が注意しようとしているところであった。

囲まれた少女には犬耳がついており、“人間”とは違う“獣人種”であると、推測できる。

獣人種とは、ヒトとは違う進化のルートを辿ってきたとされる人種で、大まかな特徴としては、魔力がヒトより少ないが身体能力はヒトのそれをはるかに上回る性能であることが一般的である。ランドール王国には、魔法学園の他に戦士育成所なるところがあり、たいていの獣人種はそこにいるのが普通なのだが……。

(まあ、私には関係ないか)

そう決めて、彼女はもらった地図を片手に、学園長室へ歩を進める。後に彼女は関わらなくて本当に良かったと、ない胸をなで下ろすのは秘密である。

青い髪を腰あたりまで長く伸ばし学園の制服に身を包んだ少女、  
リリー・ブルートンは不愉快だった。自分の親友であるカヤ・  
ドツペルバウアーが“犬人族”であるという理由だけで謂われのな  
い因縁をつけられていたからだ。

しかも、その因縁をつけていた相手が彼女が大嫌いなウオトキ  
ン・ゴールドバーグだからその不愉快っぷりは半端ないことだろう。

「まったく……なぜブルートン家のお嬢様がこんなイヌツコロを相  
手しているのか不思議でたまらないよ……」

やれやれとギザッぽく肩をすくめ、頭を振るウオトキンに同意  
するように周りの取り巻きからクスクスと笑い声が聞こえる。

リリーは顔を怒りの色に染め上げるが、学園内での魔法は禁止  
されている。

「黙りなさい！ 新興貴族のしかも伯爵ふぜいが……由緒正しい公  
爵家であるブルートンに逆らうつもり！」

「いえいえ……そんなつもりは……気に障ったのなら謝罪しましよ  
う」

ああ言えばこう言う。仰々しく頭を下げるウォトキンだが、その目にやどる侮蔑の色を隠そうともしない。

それを感じ取ったリリーは堪忍袋の緒が切れたのか、手を上に上げて魔法を放とうとするが、

「なにをしている」

凜とした青年の声があたりに響いた。

「まったく、あんのクソ爺……いまさら学園なんぞに行かなくてもだな……」

1人の青年がぶつくさ言いながら学園への道を歩いている。

彼の名前はニール・グレーヴス。美しい青い髪はもはや芸術と言っても問題はなく、すらりとした長身。さらに、その美貌は嫉妬の女神ですらあまりの美しさに嫉妬すらできないだろう。

つまるところ超絶イケメンというわけである。

さらに、彼は冒険者ギルド“レッドウイング朱い翼”の最高位であるギルドラ

ンクX、“七色の帝王”という、いかにも中二受けしそうな二

つ名を持っている。

つまるところ完璧超人というわけだ。　なんかイラつく。

「クソが……ん？」

「まちなさい！」

ブツブツと自分に奇妙な命令を下したギルドマスターへの恨みつらみをつぶやいていると、自分の前方でなにやら騒ぎがある。とりあえず、女子供に甘い彼は軽く仲裁しようと思われに近づくが、

「！」

近づいた途端、彼女は上げた右手に魔力を集める。魔法を放つ気だ。

そういう状態なら慌てないわけがない。ギルドランクX（笑）の彼は、自慢の脚力で彼女に一気に近づいた。

「なにをしている」

凜とした彼の声があたりに響いた。

「入るぞ」

そう言つて、セフィーは立派というより、堅固な櫪の木製の大きな扉を開ける。そこは赤絨毯が敷き詰められており、奥には重量感がある櫪の気製の机が。さらにその奥には代々の功績を称える表彰状やトロフィーなどが置かれている。

「ああ、ようやく来たか」

そう言つて出迎えたのはこの魔法学園の学園長、エドガー・バーグレーである。前話で、セフィーやレオナルドと一緒に話していた人でもある。髪は全て白に染まり、その顔には幾多もの皺がよつている。しかし、その目は若者のように爛々と輝いている。高位の魔術師にしか着ることが許されない上質なローブに身を包んでいるため、体格については平均より少し高いという程度しか分からない。

「さてと、協力者はドコだ？」

そう呟いて周りを見渡すセフィー。数々の賞やトロフィーに興味を示しているようだ。

「申し訳ないが、協力者が誰なのか私も知らないんだ。少なくともこの学園にはすでに潜入しているらしいがね」

「……探せ。ということか」  
「そういうことだ」

たたく、めんどうだな。そうセフィーが呟いていると、堅

固だったドアが突然音を立てて吹き飛ばす。

「まったく、なんでこんなに複雑なんだよ」

ポリポリと、頭を掻きながら粉碎されたドアを足蹴にやってきたのは、イケメン主人公（笑）ニール・グレイヴスだった。

エドガーは吹き飛ばんだドアを見てため息をつき、セフィーは吹き飛ばした張本人を見てため息をついた。

## 2・英雄と化物（後書き）

毎週投稿ってこんなにきつかっただろうか……。以前は週に2、3話は余裕だった気が……。

6 / 16 文章追加。 密偵について設定変更。

7 / 17 ルビ修正。

### 3・教室にて～凡人の反応～（前書き）

何とか間に合ったぜ！ …… もっと余裕を持ちたいなあ。でも  
余裕を持つとサボっちゃいそうだしなあ。

### 3・教室にて～凡人の反応～

「俺が呼んだら入れよ。……って、お前ら仲良くしろよ？」  
『無理だな』

4 Aの担任、ヴィンセント・オルセンは突如転入してきた問題児2人に頭を抱えなくなった。問題児とは無論、セフィーとニールのことで、彼らは今互いに別方向を向いている。

なぜか、簡単である。

セフィーはニールのことを力に溺れた三流だと思っ<sup>カス</sup>ているし、ニールもそんなことを考えているセフィーと仲良くなるのを早々に諦めているからだ。

協調性の欠片も見られない2人に、ヴィンセントは安易に4 Aの担任を引き受けたことを後悔した。

（あの人凄く格好良かったわ……なんて名前なのかしら……やだっ、私ったら……）

もうすぐ授業が始まるというのに、イヤンイヤンと身体を奇妙にくねらしているのはリリー・ブルートン。どうやら止めに来たニールに一目惚れしてしまったらしい。

(ちっ……なんだあいつのあの魔力は……さすがにあれは異常すぎる……)

ウオトキンも先程対峙したニールのことを考えていた。

ニールの膨大な魔力、それを感じ取った彼はその凄まじさになにもできず、とりあえず捨てぜりふを吐いて、教室までやってきたのだ。

(転入生か……)

朱い髪をツインテールにして、静かに本を読んでいる少女、名前をアリシア・レッドフォードという。七大公爵家の一つ、レッドフォードの長女でもある。

(……気のいい奴だといいな)

我関せず的な雰囲気醸し出しているが、一応気にはしているようだ。

それぞれが思い思いの考えを言い合う中、ついに始業のベルが鳴る。

「おし、全員席に着け。昨日言ったとおり転入生を紹介するぞ」

「先生！ 男ですか？ 女ですか？」

「両方だ」

「かっこいいですか？」

「安心しろ。2人とも美形だ」

イヤッホオオウ！ という声がところどころから聞こえるが、それを無視してヴィンセントは教室の外に待機させていた2人を呼ぶ。

ニールが入って来たとき、女子の黄色い悲鳴が、セフィーが入って来たとき、一瞬で教室が静かになった。

（まあ、当然か……）

セフィーは自分の周りに人がよらないことを予測していた。が、さすがにまったくくないのは少なからず効くらしい。

（暇だしなにしようか）

ごめん。 何度も嘘ついて。 全然効いていなかった。

見ればニールの周りには多くの人（大半が女子）が集まってきている。その中心は周りの殺気を気にしている様子ではない。

（まあ、あいつがヘタを打とうと迷惑がかからなければ私としては気にすることではないからな）

そのまま机の上につつ伏せになり、眠る体勢に移るセフィー。  
ふと、窓側に視線を向ければ青い猫が視界に入った。首には  
赤い首輪をしているのが鮮明に映った。

(……ああ、“アイツ”か。上も思い切った決断をしたものだ)

いや、この場合はレオナルドか。  
そんなことを考えながらセフィーは浅い眠りについた。

「……」

アリシアはニールにもセフィーにも近寄らず、静かに本を読ん  
でいた。その本はとても学生が読むようなものではないものだと  
ここで追記しておく。

「アリシア」

そう呼ばれて、本から目を逸らして声のする方に目を向けてみ

れば、そこにはウオトキンがいた。

伝統がある貴族からすれば、商人からの成り上がりものであるゴールドバーグ家は嫌われている。

しかし、アリシアは努力家気質があるウオトキンのことを好ましく思っていた。

「転入生についてどう思う？」

「期待した私がバカだった。　　と言っておこう」

ウオトキンに本心を打ち明けるアリシア。

事実、アリシアは転入生について興味を失っていた。セフィーが軍に所属していることは周知のことだし、ニールについては周りが勝手に騒ぐだろう。興味を持たずとも、情報は勝手に流れてくる。それに彼からはなんとも言えない胡散臭さが漂っていたらしく、彼女は彼に対して強い疑惑を抱いているらしい。

しかし、一学生である彼女になにかする力もなく、それに怪しげな転入生よりも彼女は来週のテストの方が大切だった。

「次はお前に勝ちたいものだ」

「おやおや、ならば僕も勉強するでしょう。　　今回はさすがに危なそうだ」

そんなコントもどきを話し合いながら、談笑する2人。　　誰の目から見ても、勉強家のカップルにしか見えなかった。

(はっ……話しかけるなら今よ！ 他の人達の前で堂々と礼を……！  
べ、別にもっと彼と仲良くなりたいたいかじゃなくて……ああ  
！ 私ったら、助けてもらったなら礼を言うのが当然だというの  
に！)

ツンデレ少女、リリー・ブルートンは一目惚れしたニールに対してなにもできないでいた。

彼女は知らない。彼が巷で有名な“七色の帝王”であることも、彼には何千という恋のライバルがいることも、その中に自分の親友が入ることになることも。

### 3・教室にて～凡人の反応～（後書き）

感想お待ちしております。 評価でもいいのよ？

6 / 16 一部校正。 文章が短くなっただって？ 気にするな！

#### 4・模擬戦闘〜後に響く初陣〜（前書き）

先週は更新できなかつたくせにこの量とか……

#### 4・模擬戦闘〜後に響く初陣〜

「はい、それじゃあ次は実習だから、模擬戦闘室に集まるように！」

歴史学の教師がそう言って教室から出て行くと、とたんに教室は騒がしくなる。

それもそのはず、今日は転入生がやってきて初めての実習だからだ。これで大体の実力が分かるといふもの。

「……」

「じゃあ行こうか」

周りの視線を気にせずに、2人の転入生は模擬戦闘室へと歩いていった。

模擬戦闘室。そこは学園の生徒が己の魔法を見せ合い切磋琢磨するための場所。

しかし、どうしても馴れ合い上、律儀に魔法を撃ち合い防ぎ

合いになってしまっている。

そんな中、“闇の超魔導”のセフィーは、2階の観客席で静かにさっきの授業の復習をしていた。

（3229年蠍の月、ジャステイーナ公国滅亡……3230年牡羊の月、ジャステイーナ公国滅亡……半年も保たなかったのか）

「ねえ！」

（まあ、相手が相手だしな。仕方ないと言えば仕方ないか）  
「ねえったら！」

（3255年獅子の月、現国王“レオナルド・ランドール・キングストン”誕生。アイツのことを歴史に載せるのは早すぎるような気がするが）

「話を聞きなさい！」

ここで歴史の教科書を取り上げられたセフィーはようやく自分が話しかけられていたことに気がつく。

取り上げられた方向に視線を向けると、魔法学の担任である女性がいた。名前はめんどくさいのでセフィーは覚えていない。

「なんで他の人たちの試合を見ないの！」

「面倒くさいから」

「面倒くさいじゃなくて……！」

「あんな下手くそな奴らの戦いなんぞ見るより、授業の復習をしていた方が私には都合がいい」

「この子は……！」

確かに“闇の超魔導”としてその名を馳せるセフィーにとってはこのような戦いなど、なんの意味も持たないだろう。

そういうことに気がついた女教師は「でも、けれども」と呟くばかりでこれ以上彼女に口出しすることはなかった。

(くだらん)

完全に女教師に対する興味を失ったセフィーは闇の中から新しい教科書を取り出す。任務続きだったのでこういう知識に触れたことはなかったのだ。

今回取り出したのは魔法力学の教科書。ある程度のことは大体知っているとはいえ、このように本に記されたものを読むのが彼女は好きなようだ。

「ねえ」

魔法力学の教科書を読み進めていくうちに、自分が再び話しかけられていることに気がつく。しかし、周りには誰一人としていない。

「こつちだよ」

「！ ああ、 お前か」

いや、一匹だけいた。前話でセフィーが眠る前に見た青い猫だ。

「“青猫”お前か。 今回の調査員は」

あくまでも小声で。たとえ周りに誰もいなくとも小声で彼女は語りかける。自らの膝の上に収まった青い猫に。

「まあね、 こういった閉鎖社会にはボクみたいなのが一番楽しんだ」

「それで？ なにか掴んだのか？」

「ごめんね、まだなんだ」

怪しい奴らは多々いるんだけどね。中々ボ口を出さないんだ。最後にそう呟いて、青猫は彼女の膝から降りる。

そのまま開いた窓から出る前に尻尾を2、3度振る。青猫らしい別れの合図といったところか。

それを見たセフィーは教科書を読むのを止め、一度下に降りる。もうそろそろ自分の出番だと知って。

「紅蓮の焰よ！ 槍と化して敵を貫け！ “ファイヤランス 火焰槍”！」  
「壁 ！」  
「なんの！ 荒ぶる水流よ！ 我が前に現れ壁と化せ！ “アクアウォール 水流障壁”！」

焰の槍と巨大な水の壁がぶつかり合い、両方とも消滅する。

「やるな！」

「そつちこそ！」

（いや、今の火焰槍避けれるだろ。ファイヤランス

アクアウォール 水流障壁の発生も遅すぎる）

まあ、学生ごときに期待するだけ意味ないか。  
そう結論づけて、溜め息を吐くセフィー。自身も学生である  
ことを頭に置いていない。

「次！ セラフィーナ・ダンロップとアリシア・レッドフォード！  
」

ああ、次は私か。

そう呟いて、中央の戦闘用に立つセフィー。  
彼女の目の前には赤髪ツインテールの少女が。

「はじめっ！」

先程の女教師がそう叫ぶと同時に、赤髪の少女は大きく距離を  
とった。

アリシア・レッドフォードは緊張していた。その半面、作戦  
を静かに練っていた。

「はじめっ！」

教師の声とともに、大きく距離をとるアリシア。 対戦相手の銀髪少女は動かない。

(まずは……！)

「猛る炎よ！ 我が命に答え、敵を穿て！ “ファイヤーボール 火炎弾”！」

「ふん……」

彼女が放った炎の玉はセフィーに届く前に、“闇”に呑み込まれる。

おお、と盛り上がる周りを尻目に、アリシアは次の手を打つ。

(詠唱しても“これ”ね……！ 下級でチマチマいくのは不可能……)

……なら！)

「貫け！ “ファイヤージャベリン 火焰連槍”！」

「……」

先程の生徒が放った“ファイヤーランス 火焰槍”よりも二回りほど小さい焰の槍が、10本まとめてセフィーに襲いかかる。詠唱を破棄した中級レベルを放てることができる生徒がいることにセフィーは驚きを隠せないようだが、さっきと同様、“闇”にすべて呑み込まれる。

(くそっ……！ これが“闇の超魔導”ってわけね！ ホントに羨ましいわ、そのちから魔力！)

圧倒的なセフィーの強さに、思わず舌打ちをしながらセフィーから距離をとるアリシア。予想していたこととはいえ、自分の得意技があっさりと破られるのはいささかキツイ。

(だったら……！ この“とっておき”を！)

軽く息を整えて、“とっておき”を放つ決意をするアリシア。  
この“とっておき”は先週完成したばかりの誰も知らない彼女オリジナルの技。属性も彼女オリジナル。  
幸いというべきか、セフィーは相手を格下と見ている。相手を打ち倒すことは不可能でも何かしらのダメージを与えるのは可能かもしれない。

「我宿すは灼熱の力、深遠なる大地の波動。星々の命の鼓動よ！  
我が祈りの下に全てを焼き尽くす数多の槍と成りたまえ！」

魔法には扱いの難しさと消耗の大きさに合わせて、ランク分けされている。その基準は適当だが、ある程度整っているため、

一般的に知られている。  
ファイヤーボール ファイヤーランス 火焔弾や火焔槍などは下級、  
アクアウォール ファイヤージャベリン 水流障壁や火焔連槍などは中級レベルとされている。

そして、彼女オリジナルの魔法。これの威力は絶大だが、その扱いの難しさや消費の激しさは全ての魔法をワンランクアップさせてしまうのだ。

その危険性に気がついたセフィーだが、もう遅い。

ヴォルケインジャベリン  
「溶岩連槍！」

先程と大きさの変わらない溶岩の槍が、今度は20本まとめてセフィーに襲いかかった。

#### 4・模擬戦闘〜後に響く初陣〜（後書き）

誤字訂正、 評価感想お待ちしております。

7/17 文章訂正。 やや短くなっちゃいました。

5・模擬戦闘〜溶岩の槍と虹色の英雄〜（前書き）

今までで一番長いお話。先々週のお休みはこのためさ！（多分）

## 5・模擬戦闘〜溶岩の槍と虹色の英雄〜

「我宿すは灼熱の力、 深遠なる大地の波動。 星々の命の鼓動よ  
！ 我が祈りの下に全てを焼き尽くす数多の槍と成りたまえ！ 溶  
ルケインジャベリン  
岩連槍！」

20本まとめてセファイに襲いかかる溶岩の槍。 それら1つ1  
つが人の命を奪いとるには十分な火力が秘められている。  
小さく舌打ちすると、 同数のやや大きめの闇の槍を作り出すセ  
ファイ。 真つ向から叩き潰すつもりらしい。

（くそっ……！ 足元が定まらない……！）

酔っ払ったように奇妙なステップを踏み、 荒々しく息をするア  
リシア。 魔力が大分無くなってきている証拠だ。 完全にへたり  
こまないのは彼女なりのプライドか。

そうしている間に、 溶岩の槍と闇の槍がぶつかり合う。 だが、  
溶岩の槍はすべて闇の槍に打ち負けて霧散する。

これは魔力の質の問題である。 魔力は込めれば込めるほど、  
大きくなりその効果範囲が広がる。 しかし、 魔力を一点に集  
中するとその質が高まるのだ。 それを利用すれば、 下級魔法で  
中級魔法を打ち破ることも不可能ではない。

「！  
」（ちっ……大分魔力を練ってやがった）

しかし、 魔力をそれなりに込めていたはずの闇の槍もその大き  
さを3分の1にまで縮めており、 溶岩の槍の火力を物語っていた。

それでもまだその形を失わない闇の槍はまっすぐアリシア目指して突き進む。

急いで防御魔法を唱えようとするが、魔力が限界であるアリシアがそんなもの唱えられるわけもなく。

(ちくしょう……)

諦めて目を閉じるアリシア。せめて痛みをあまり感じないようにしてくれよ、と自分の対戦相手である銀髪少女に対して祈ることしかできなかった。

だが奇跡は起こる。

「……なんのつもりだ。ニール」

「お前は彼女を殺す気か！」

いつまでたつても来るはずの衝撃が来ないことが気になってうっすらとその目を開くアリシアの視界に飛び込んできたのは、自分をお姫様抱っこをしているニールだった。

闇の槍と溶岩の槍がぶつかり合った瞬間、ニールはアリシアの敗北を悟った。その上で彼女を助けるべく瞬時に“レポート転移”を発動。闇の槍が届く直前にアリシアを救出したというわけだ。

「殺すわけがないだろう。お前は魔法に込められた魔力の量すら見抜けないのか」

呆れ半面、バカにしているのが半面。仰々しくため息をつくセフィー。だが、これは半分嘘である。

確かに、アリシアに届くはずだった闇の槍は彼女を殺傷しうる威力はなかっただろう。しかし、それはアリシアの“ヴォルケイノジャベリン溶岩連槍”の火力が高かったからであり、もし彼女の魔法が中級程度だった

たのなら、ニールは間に合わず、アリシアの串刺しが出来上がっていたことだろう。

まあ、そんなことをして自分が不利になるような愚行を犯すほど、セフィーは愚かではないと思う。思いたい。

その事実気づいたのは魔法を放ったセフィーただ1人であり、他の者はまったく気がつかなかったらしい。ニールでさえも悔しげに顔を歪める。

(いや、お前は気づけよ。ギルドランクX)

まさか完全に黙殺できるとは思わなかったセフィーは鳩が豆鉄砲をくらったような顔になる。何気にレアだ。

ちなみに、なぜ彼女がニールの正体を知っているかということ、1話の時に渡された資料。あの中にニールのことも詳しく書いてあったのだ。彼の好み、戦闘スタイルからその出自まで。

本来は高位のギルドメンバーは余計な争いを避けるために、プライベートは完全な極秘扱いになり、国家でも知ることは難しい、というより不可能なはずなのだが……。

(本当にどうなっているんだろなウチの諜報機関)

彼女が知る諜報機関のメンバーだけでもそれなりに優秀な者たちばかりだ。しかし全員が全員、「自分より上なんて沢山いる」と主張してやまない。少し前まで彼女は彼らなりの冗談だと思っていたのだが……。今ならその主張、あっさりと納得するだろう。

「……もういいだろ。私は戻らせてもらっ」

そう言った後、“闇”を使って再び2階へ戻るセフィー。そ

の目には、思わぬ拾いモノもしたような喜びと、ギルドランクXの探知能力の低さを嘆いているようだった。

「大丈夫か？」

とりあえずニールは自分の腕の中で呆けている少女、アリシアに語りかける。地味に周りの女子からの殺気がハンパないのだが。

「……あ、ああ。大丈夫だ」

自分が置かれている状況に気づいたアリシアは慌ててニールの腕から降りる。しかし、魔力が枯渇寸前までいていた彼女はまだ魔力が回復しきっていない。するとどうなるか。

「！」

「ほら、大丈夫じゃないじゃないか。保健室まで「いい！大丈夫だから！」！」

ふらついて危うく倒れそうになるのをニールが右腕を掴むことで

食い止める。そのまま保健室まで引つ張って行きそうなニールの腕を無理矢理振り払い、フラフラとした足取りで模擬戦闘室を出て行く。時々壁などにぶつかっていたが本当に大丈夫だろうか。

「……つ、次に行きましょうか！ 次、ニール・グレイヴスとウオトキン・ゴールドバーグ！」

女教師がそう言うと、一人の青年がニールの目の前に歩み寄ってきた。

「さて……と、君には聞きたいことがあるのだが……」

ウオトキン・ゴールドバーグ。祖父の代から貴族に成り上がった元商家の“新興貴族”と呼ばれるゴールドバーグ家の長子。

新興貴族は「貴族の地位を金で買った」と昔からの貴族にバカにされがちだが、ゴールドバーグ家はそうではなかった。なにせ、多くの貴族に金を貸しているのだ。文句を言うなら金返せ、というやつである。現実是非情なり。

広大な領土を持つたり、要職に就いている上の方の貴族は借りていないのだが、ろくな仕事に就けない下の方の貴族は毎年の利子の返済に苦しめられ、ゴールドバーグ家は領土とその返済だけで、気楽な生活ができるという。

そんなゴールドバーグ家の最大にして唯一の悩みが魔力の少なさである。

元々平民であるゴールドバーグ家は昔からの貴族よりも魔力量があるかに少ないのだ。祖母も母も下の方の貴族で魔力量は多くない。父や祖父よりはるかにあるのだが。

そんななか生まれたウオトキンは生まれつき上位の貴族に匹敵する魔力を持っていた。家族全員が大喜びのあまり宴を始めたのはここだけの話である。

それゆえに、ウオトキンは思うのだ。「与えられた力と役割をこなすことが人がこの世に生を受けた理由なのだ」と。だから、

彼はカヤ・ドツペルバウワーが嫌いだった。

犬人族と呼ばれる俊敏さと圧倒的なスタミナ、様々な匂いを嗅ぎ分けられる鋭い嗅覚を併せ持ったまさに犬のような才能。

本来なら、戦士訓練所でその才に磨きをかけるべきなのだ。

犬人族には相応しくない程の圧倒的な魔力を持つならともかくとして、カヤの魔力は犬人族よりやや高め程度。それだけでこの魔法学園に通うなどと言語道断。本当に魔法を会得したいのなら、

それこそ血を吐くような努力をすべきだ。自分の親友であるアリシア・レッドフォードのように。

まあ、そんなことはどうでもいい。彼は今目の前にいる男、ニール・グレイヴスに強い疑問を抱いていた。その魔力は教師や学園長を超え、知識も豊富。イケメンだし、先程のやりとりを見ても戦闘慣れしているのだろう。

なぜ、こんな男が転入してきたのだろうか。学園に転入せずとも、ある程度の贅沢が可能になる実力を持っている。

一度しっかりと勉強を試みたか？ いや、さつき書

いたとおり知識は十分だ。　これ以上学園にいても時間の無駄だろう。

同世代の友人が欲しかった？　いや、これも違うだろう。同世代で学園や訓練所に通っているものなど全体から見れば少数だ。冒険者ギルドにでも所属すれば低ランクでも同世代がいるだろう。彼らと行動すればなんの問題もない。

早い話がちぐはぐ、なぜここにいるのか分からない。セフィは恐らく、国からの命令。目的はいまいち分からないが、なにか重要な事でもあるのだろう。

「……なにがだ？」

「まずはここにいる理由かな。君ほどの実力者なら、ギルドでも大成すると思うけど」

「ふん……お前に話す理由なんてあるのか？」

「おやおや、手厳しい」

実際はギルドマスターに命令されただけで、詳しくは知らないなどと口が裂けても言えない。だが、そんなことを知らないウオトキンは相手がこつちを嘗めていると感じ取った。ニール・グレーヴス、とことん人の感情に鈍い男である。

「じゃ、始めようか。よろしくお願いしますよ」

「あ、ひゃい！　は、始め！」

ウオトキンの言葉に我に返った女教師（さっきまでニールに見られていた）は慌てて開始のセリフを言う。

その言葉に突き動かされたようにウオトキンは幾多の雷の球を撃ち込んだ。

## 5・模擬戦闘〜溶岩の槍と虹色の英雄〜（後書き）

前話と今回で、セフィーが詠唱中のアリシアに攻撃しなかったのは彼女を嘗めていたため。本来なら詠唱なんてしたら壁役でもない限りフルボッコ確定ですよ。ええ。

感想評価、誤字訂正。お待ちしております。

## 6 ・模擬戦闘く痛みと強さく（前書き）

それなりに長くなったお話。

模擬戦闘はこれでおしまい。

## 6・模擬戦闘く痛みと強さ

「ちくしょう……」

保健室でもう何度目かになる言葉をアリシアは呟く。

最強と呼ばれる者に一方的に叩きのめされ、同級生に救われてきつと自分の父はいい顔をしないだろう。いや、顔を向けてくれるのかも怪しい。

彼女、アリシア・レッドフォードは七大公爵家の一つ、レッドフォード家の長女である。

七大公爵家とは、はるか昔にランドール王国誕生の際に初代国王を助けたとされる7人の賢者たちの子孫で、ランドール王国ではこの七つの公爵家が唯一公爵の位に就けるのだ。

そして、そのうち五家が同学年という異常っぷり。その学年は四年というね。運命の神が大爆笑している様が目に映る。

さて、そんなことはともかく、彼女アリシアには妹がいる。自分よりはるかに優秀な妹が。両親も彼女のことを誇りに思っているほどに。

なら、自分は？もし、ニールがこのことを聞いたなら毒にも薬にもならない励ましの言葉をおくるだろう。もし、セフィアが聞いたなら彼女の才能を見抜けない両親をバカにして、そんな両親を気にしているアリシアをあざ笑うだろう。

だが、ここには彼女しかない。己の才能に気づかない彼女しか。

「ちくしょう……力が……誰にも負けない力が……」

欲しい。彼女のこの思いがランドール王国を、セフィーを苦しめることになることは今は誰も知らない。

数多の雷鳴弾サンダーボールがニールめがけて、その威力を見せつけんとバチバチと帯電する音を撒き散らしながら猛進する。雷鳴連弾サンダーショットと呼ばれる中級魔法を無詠唱で放たれたことにざわめく会場。ちなみに、セフィーはすでに階上で居眠りをしている。色々と面倒くさくなったらしい。

「ちつ……！  
「ホーリーキャノン 聖天大砲」！  
」

だが、幾多の雷の弾丸はニールが放った一筋の光によって全て消し飛んでいく。その光景に再び沸き上がる会場。

光と闇は誰もが持っているわけではないことは、すでに説明済みだと思ふ。光と闇を扱うには才能が必要になる。その才能を持つ者は少数で、その秘められた能力もまちまちだ。厳しい訓練を重ねて、辛うじて下級を使えるようになる者。何もしくなくても上級を操りこなせる者。おそらくニールは後者だな。と決めつけてウオトキンは次の手にでる。

「サンダーキャノン  
「雷鳴大砲」  
」

ギリギリ上位に位置するであろう大砲系キャノンの魔法を発動するウオトキン。放たれたそれはニールのよりも小さいが、一般の学生からすればはるかに大きな威力だ。それはあつという間に土煙を上げながらニールを呑み込む。観客席から悲鳴が上がる。誰もが思ったのだろう、ニールが致命傷を受けたことを。

「……あ！ち、ちよつと！なにしてるの！？あんな危険な魔法を「さつき向こうも使ってたよな？」……」

注意しに来た女教師はそれで沈黙する。なんやかんやでこの人、色々教師として未熟である。

それに、ウオトキンの本気はあの程度ではない。彼が全力を出せば、ニールがさつき出した者よりも広範囲かつ、高威力のものを出せる。魔力がほとんど枯渇してしまうので出さないが。

女教師の注意を受け流したのち、ウオトキンは土煙で見えないがニールがいるであろうところに再び雷鳴連弾サンダーショットを撃ち出す。さら

にある程度撃ったところで、今度はさつきより一回り大きな雷鳴サンダーキャノン大砲を撃ち込む。

最初の雷鳴大砲は囷サンダーキャノン。次の雷鳴連弾サンダーショットで動きを封じ込め、最後の雷鳴大砲サンダーキャノンで決定打を与える。単純かつ力押しだが、中級と上級の魔法を連発するテクニクと魔力量。これがウオトキンの強みとも言える。

だが、さすがに疲れたのか、肩で息をしながら汗で濡れた髪をギザつぽく払うウオトキン。魔力の使いすぎでこうなっている。一応説明しておく。

(まだ、大分魔力まよゆうは残っているとはいえ、大分使ってしまった。でもまあ、これで……)

やっただろう。そう思い、軽く息を調えるウオトキン。だが、これはフラグである。誠に残念ながら。

「光よ、悠久の時を生き続ける光よ」

「!?？」

土煙の中から聞こえるニールの声、それは強い力を宿しながら、その力を増幅させていく。

「輝ける光よ。闇を切り裂く光よ」

「ちい！ 聖なる希望の担い手よ！ 我が名を宿して……」

ニールから来るであろう反撃に、慌てて防御魔法を唱えるウオトキン。敵の詠唱スピードを鑑みて選択した魔法は少しずつその形を成していく。

「我が刃と成りて、敵を薙払わん！」

「脅威から我らを護りたまえ！」

そして同時に完成する魔法。学生たちが見守る中、2つの魔法が激突する。

「<sup>ヘブンズアーク</sup>聖天大聖！」

「<sup>シャインシエル</sup>光乃大盾！」

方や最上級、方や中級の上位。勝負は分かり切っていた。

「つつ……」

「大丈夫か？」

ウオトキンは保健室で目覚めた。体中がズキズキと痛む。すぐ左に顔を向けると、自分に対して心配そうな声を掛けた張本人、アリシアがこれまた心配そうな表情で見ている。それを見ただけで全てを理解する。負けたのか。

「他の奴らは戦勝会だとかでどっかに行っちゃったよ。まったく、自分勝手な奴らばかりだ」

「他の奴らのことなんて聞いた覚えはないのだが？」

「おや、ソイツは失言だった」

そういう軽い冗談を言うアリシアだが、かなり気にかかっていたことがある。ニールのことだ。

最後に放った魔法、他の奴らは気にしなかったみたいだが、あれは最上級の魔法だ。セフィーが自分に対して放った闇の槍とは威力なんて桁違いに違う。ウオトキンが中級の障壁を築かなければ、ウオトキンは今頃死んでいるに違いない。自分を救った人間が自分の親友を殺そうとした。彼女はニールの考えがイマイチ掴めないでいた。

「アイツは一体何者なんだろうな……」  
「さあ？ ロクな奴ではなさそうだ」

「違う。そう言ってアリシアは笑った。自分が心の中に生んだ疑惑を打ち消すように。」

「いやー、すげえなお前！ あの“新興貴族”に勝っちまうんだもんな！」

そう言いながら、ニールの背中をバンバンと叩く金髪少年、彼の名前はリッキー・イエローアーン。七大公爵家の一つ、イエローアーンの御曹司である。彼自身もウオトキンの事は忌々しく思っていたものの、彼にまったく歯が立たないことを悔しく思っていた。

「ま、私は確信していましたけど？」

そう言うのはリリー・ブルートン。ちゃっかりとニールの左隣

に座り、周りを威嚇している。説明し忘れていたが、ブルー  
トン家も七大公爵家の一つを担う名家であるので、彼に近寄りた  
い中小貴族は近づけないでいた。

「それほどでもないさ……それよりリリー、そ、その、胸が  
当たっているのだが……」

「当たてるの」

そしてパーティーの主役であるニールはそのリリーに誘惑されて  
いた。お酒の力を借りて、今夜のリリーは大胆になっているよ  
うだ。翌朝には羞恥のあまり、悶死しそうだが。

「いやー、今夜のリリーは大胆だなあ！　なあ、カヤ！」

そして、豪華すぎるメンバーの中にひっそりといる犬人族の少  
女、カヤ・ドッペルバウワーは周りの雰囲気になれないように  
チビチビとお酒を嗜んでいた。無論、視線はニールから外し  
ていない。

「え？　あ、うん」

「どうした？　まだまだ、飲め飲め！」

「あ、明日も早いんだよ？　今日はこのくらいに……」

慌てて断ろうとするカヤだが、すでに彼女のコップにはたつぷ  
りと酒が注がれていた。しかも、アルコール濃度は高そうだ。

「明日も早いのに……」

ハア、とため息をつくカヤ。　どうやら、明日の遅刻は決定  
のようだ。

1人、明るめの部屋の中でセフィーは窓を開け、外の景色に見入っていた。

彼女にあてがわれた部屋は奨学生と呼ばれるエリートたちの部屋と大差なく、階も高い。この魔法学園の寮は大きく、こつちでいう高層マンションと変わらない。彼女自身もこの寮を見たとき、目を丸くしたほどだ。ちなみに、彼女の驚きの感情が面にでるのはゴルゴよりも稀である。

「さてと……どうするかな……」

“青猫”からの連絡はあれ一回きり。自分で調べることがも可能だが、もし“青猫”の調査を邪魔したらロクな結果に繋がらない。彼女はこうして待つことぐらいしかできないのだ。

「まあ、困っばいことはするかな」

そう独り言を呟くと、闇色のローブを身にまとったセフィーは、静かに自らが生み出した闇に消えていった。

## 6 ・模擬戦闘く痛みと強さく（後書き）

次回から事件を動かして生きたい。間違えた。動かしていきたい。

7 / 17 ルビ訂正。

7・夜の探索〜囷と少女と〜（前書き）

今回はあまりよくない出来。文章も短いしね。でも外せない  
ところだね。

## 7・夜の探索と囃と少女と

魔薬

それは禁断の薬。強い力を与える代償として、

身体を蝕む薬。

早い話がドーピングである。だが、その効

果が凄まじい故にそれを求める者の数は一向に減らない。

ランドール王国も含め、ほとんどの国家がその使用を禁じている。しかし、どのようなルートから流出しているのか全く分からないのが現状だ。

だが、ランドール王国は近年、軍隊内、特に魔導士達の間で魔薬を使用する者が多いことに気づき、調査を開始した。だが、まったく尻尾が掴めない。そのため、国王、レオナルド・ランドール・キングストンは出身者が多い、魔法学園で魔薬の取引をしているのでは？と推測。本来なら証拠もないのに憶測など愚策極まりないが、今回は何も手がかりがないのだ。推測にも縋りたくなる。

そのため、青猫を学園に派遣。すると、出るわ出るわ。数多の証拠品の数々が。肝心の供給源は見つからなかったが、魔法学園はこの件に関わっていることはほぼ間違いない。そのためいざという時に戦える、セフィーが学園にやってきた。これが今回の真相である。

ただし、生徒は不安にさせないように事は教えておらず、教師も真相の大半を知らない。真相を知っているのはたった4人。国王、レオナルドと、魔法学園学園長エドガー・バークレー、そしてセフィーと青猫だけである。

「……さてと、今回はこの辺にしておくか」

学園内をグルリと見渡しただけで調査を終了したセフィー。こ

んな調査では魔薬の発生源を掴むことなど夢の夢だろう。まあ、  
彼女が本当に調査に来ていたらの話だが。

「……ん？」

その帰り道、セフィーは魔力の反応を発見する。今日一度戦ったことのある魔力。アリシアのものだった。

「くそっ……」

アリシアは魔法の練習をしていた。自身には魔力量が足りない  
ので、魔力が枯渇するまで魔法を放ち、その後回復させる。  
それを繰り返しせば魔力量が増えていく。それをすることで自身の  
弱点である魔力量の少なさを改善しようと思ったのである。彼女  
の魔力量はそこら辺の貴族よりもはるかにあるのだが、七大公爵  
家からすればその量は少ない。

「どうしてもぶれちゃう。どうしたらいいのよ……」

さらに、魔法のコントロールを高めることによって、新しい

術も無詠唱で出せるようにするのである。あまりうまくいっていないようだが。

一度休憩してから、魔法の練習を再開するアリシア。しかし、やはりうまくいかないらしく、弱音がちらほら出始める。

(おやおや……)

そんな光景を見るのは先程アリシアの魔力を辿ってきたセフィーゴ本人。やはりあの魔法はそれなりに練習を積んでいるとは思っていたが、まさかここまでのものだとは思っていなかったようだ。彼女自身、“超魔導”という力に振り回されたことは多々ある。扱いきれず、関係ないものを傷つけたことなんて数え切れない。まあ、彼女はもうそんなことを覚えていないのかもしれないが、しっかりとした基礎がなければ応用が成り立たず、基礎は毎日の修練からしか生まれない。彼女の恩人の言葉をセフィーゴはふと思い出した。

(久々に修行でもしようかな)

今回の任務が終わったらの話だがな。と呟いて、彼女は学生寮に戻るために歩を進める。アリシアのことはあまり気にかけないようにした。

「……もうこんな時間……今日はもう休もうかな……？」

アリシアは焦げ跡が目立つ地面から目を離し、近くの時計台に目を移しながら呟いた。

時間は既に午後11時を回っており、規則正しい生徒はもうすでに眠り始めていることだろう。どこかの誰かどもは酒盛りをしているが。

「また上手くいかなかった……」

はあ、と小さくため息をついて、己の無力さを悔いるアリシア。一応、新しい魔法を創るのにも才能が関係していて当然なのだが、この世界、魔力が高ければいい。コントロールはある程度あればいい。新しい術の開発？ なにその暇人がやりそうなこと。といった風潮なのだ。仕方ないといえば仕方ないのだが、彼女にとっては大問題だ。

「どうしてこんなにうまくいかないんだろう……」

ため息をつきながら魔力の無さを呪うアリシア。ファイアーボール 火焰弾を作り出しながら、フヨフヨと漂わせていると、何か閃いたらしく突然目を大きく開く。

「待てよ……」

その後ブツブツと呟きながら、ファイアーボール 火焰弾を浮かべるアリシア。

結局、  
彼女が寝たのは日付が変わってからのことだった。

7・夜の探索〜囀と少女と〜（後書き）

そろそろ夏休みだね。      テンション上がるね。      感想くれたらも  
っと上がるよ。

## 8 ・魔闘祭メンバー（前書き）

ギリギリでの投稿。 来週テストがあるからと言いついてみる。

## 8・魔闘祭メンバー

「よし、今日の授業はここまでだ」

そうヴィンセントが言うと、まだ終わりの挨拶もしていないのに生徒達の気が緩む。期末考査も近いので、いつも以上に必死になっていたのだろう。ヴィンセントはそう思うと思わず苦笑しそつになった。自分の学生時代から全く変わっていない。

「ああ、そうそう。夏期休暇が終われば、すぐに魔闘祭があるだろう。明日はそのチーム決めもしたいから、今の内に相談しとけよ」

号令をかけた後、そう教えると、生徒達の間で「あ」といった雰囲気になる。転入生であるセフィーはいつもどおりの仏頂面。

ニールは頭にいくつものハテナマークを浮かべている。

転入生以外の反応も変わっていない。ヴィンセントは1人そう思うと、あの時の教師が何故ニヤニヤしながら出て行ったのか理解し、己もニヤニヤ笑いを浮かべながら、教室から出て行った。

「ニール！ 魔闘祭のチーム、一緒にやろうぜ！」  
「すまん。魔闘祭とは一体何なんだ？」  
「知らねえのかよ」。しようがねえなあ」

ニヤニヤしながらニールに話しかけた青年、リック・イエロ  
ーアーンは未だ状況が飲み込めていないニールに魔闘祭のついて詳  
しく教えた。

「なるほど……。つまり、魔闘祭は生徒達が己の実力を周りに  
見せるために各々鍛え合い戦ったための行事か……」  
「そ！ それに魔闘祭の結果が今後に響くから皆必死なんだぜ！」

そう言われて、ニールが周りを見渡せば、皆やる気に満ちて  
いる。早々にチームを組んだ者の中にはいつからトレーニングを  
始めるか、といった相談を始めている者もいる。

「ふむ……。まあ良いだろう。で？ その魔闘祭、何人でやるん  
だ？」  
「5人だったな。すぐにメンバー集めるから、ちょっと待って  
てくれ」

そう言ってリックは周りを見渡し、3人の女子を連れてきた。

「ほい、こいつらでどうだ？」  
「まったく……。なんなのよ……」  
「フム、貴公か。評判はよく耳に届いてるぞ」  
「ああ、お前か。これで今年の魔闘祭は貰ったな」

連れてこられた彼女達は特に不満もないらしく、むしろ、ニールとチームを組めることを喜んでるようだった。

一番最初のセリフはリリー・ブルートンのもの。やっぱりいうか何というか……。

二番目の武士口調の少女はイザドラ・キングストンのもの。“キングストーン”の名字で分かるように、彼女は国王、レオナルド・ランドール・キングストンの異母妹だ。艶のある美しい黒髪をひとまとめのポニーテールにしていて、顔つきはレオナルドと同じく、整っているが、目つきは鋭い。スタイルは中々のものである。

最後のセリフはリックやリリー達と同じ、七大公爵家の一家、グリーンハウ家の次男坊、フレッド・グリーンハウのものである。特徴的な緑髪はやや長く、肩まで伸びているのをひとまとめに結んでいる。

「よしっ！ このメンバーなら優勝間違い無しだ！」

そう言いながら、「俺いい仕事したぜ！」と言わんばかりに大げさに頷くリック。確かにこのメンバー、かなり強い。

ギルドランクXのニールに、七大公爵家のリック、リリー、フレッド、そして王族のイザドラ。経験不足は否めないが、それは他の学生も同じ。確かに優勝は貰ったようなものだろう。だが、強さの基準をあまり知らないニールの目には、彼女達が非常に未熟に映る。

「ああ、じゃあ夏休み中に俺の家で特訓でもするか？」

ニールの突然の呟きに驚く面々。彼女らの家は大変豊かだが、ニールはただの平民。あまり裕福そうには見えなかったのだ。

「あなたの家にそんなスペースあるの？」

「ああ、こつ見えてもそれなりに稼いでいるからな」

へえ、とつばやく4人を見て、ニールはトレーニングの内容を考えていた。一応、その前にテストがあるのだが……

(魔闘祭ねえ……。本当、ふざけた伝統だよ)

魔闘祭とは全く関係のない少女、セフィーは教師が出て行ったあと、そう思った。

魔闘祭は大々的にランドール王国内で行われるイベントだ。戦士育成所で行われる武闘祭と併せて二闘祭と呼ばれている。本来は、それぞれちまちまと行われていたはずなのだが、いつの間にか大袈裟になってしまい、今では観光客が落とす金でランドール王国の収入の6分の1となっているほどなのだ。

しかし、それだけ目立つということは、多くの人間にランドール王国の人材を見られているという事、今は世界情勢も小康状態ではあるものの、三代前は賄賂や脅迫による引き抜きも盛んに行われていたという。

本来なら、このようなものなど悪習に過ぎないのだが、なぜ

か今まで普通に行われている。セフィーとしては、裏切り者を始末したりする彼女の職務上早々になくなっただけなのだが。

「あ、あの……」

「ん？」

急に誰かから声がかかり、セフィーは自らの意見を打ち消す。声をかけられた方を見れば、5人の男女がこちらを見ていた。全員が彼女のクラスメートだが、彼女はそれを覚えていなかった。

「も、もしよかつたらなんだけど……わたしたちの戦い方見てアドバイスがほしいんだけど……」

そこまで言って、近くにいた赤髪の男性は「おい、ヤツパ止めようぜ」などと言っているが、セフィーはアドバイスぐらいなら別に良いかもしれないと考えていた。

なぜなら、アドバイスぐらいなら大した手間にならないし、それで彼女らが強くなれば軍にでも入って、セフィー自身の負担軽減のために働いてくれるかもしれない。それに彼女自身の強さを見せつけられれば、そう簡単に裏切ることなど考えないだろう。

が、結局彼女達はセフィーのアドバイスを得ることを諦めたのだろう。簡単な謝罪をすると、教室を出ていった。ここにセフィーの人徳の低さがにじみ出ていた。

8・魔闘祭メンバー（後書き）

テストの準備？

大丈夫だ、問題ない（多分）。

9・魔闘祭の盡く意思（前書き）

テスト期間中も投稿。　かなり短くなっちゃったけどな！

## 9・魔闘祭〜盡く意思〜

「クククク……」

1人の男が静かに笑う。その周りにいる者達はまるで人形のように動かない。

「もうすぐだ……ああ、もうすぐだあ」

まるで劇の登場人物のように大袈裟に喜びを表現する男。その目には凄まじい狂気が浮かんでいる。いや、その狂気は段々と強くなっているようだ。

「待っているよ“七色の帝王”……この僕の恐怖！ 痛み！ 絶望

！ 君に味合わせてあげるよ……」

「つるせえぞおらあ！」

「……！ すいませんでしたあ！」

最高潮に達した狂気は隣の部屋の男の怒鳴り声であっさり消えてしまった。

魔闘祭まで、残り2ヶ月と10日。

「くああああ……っ」と

この世のどこかで自分を貶める陰謀が展開されつつあるというのにこの男、のんきすぎである。

今も大袈裟に欠伸などして、大きく伸びをしている。

今は、テスト期間最終日。そして先程鳴った鐘の音は、テストがすべて終了したことを意味している。

当然彼は優秀であるので、テストは10分で終わらせ、早々に眠りについていた。それを見た女子の大半はあまりの愛らしさに鼻血を流しながら和み、その光景を見た男子は憎しみの目で二ールを睨みつけた。だが、そんなことは彼は全く知らない。知るうはずがない。

それゆえに、今日も彼は女子を魅了し、さらに男子に恨まれていくのだった。

「よしつと……まあまあな出来かな」

テスト終了の鐘が鳴った瞬間、アリシアは持っていたペンをコ  
ロリと机の上に転がすように置いた。

まあまあな出来と呟いたものの、彼女は今回のテストいくつか  
手応えがあった。全部は無理かもしれないが、そのいくつかな  
らウオトキンを超えてたかもしれない。それほどの出来だ。

テストの緊張から解き放たれたからか、アリシアは一度大きく  
伸びをすると帰り支度を始める。

(さてと……帰ったら“アレ”の練習でもしようかな。思ったよ  
りもうまくできているし)

最近気づいた“アレ”についての練習は、予想以上の成果を見  
せていた。そういった才能があったのかは分からないが、彼女  
は少しずつ強くなっていた。

(夏休み……時間はたんとあるんだ。確実に極めればいい……)

手に入るであろう確実な強さ、それに彼女は興奮していた。

“アレ”を極めれば、自分も彼らと同じ位置に立てる。そう確  
信してもいた。

「アリシア？」

「！……なんだ、ウオトキンじゃないどうしたの？」

そんなアリシアの様子が気になったのか彼女の友人であるウオト  
キンが話しかける。自分の考えに集中していたアリシアは反応が  
遅れてしまい、それがさらにウオトキンの不信を促す。

「ああ、いや、なんでもない。もうすぐ夏休みだからね。なにをしようか考えていたところなの」

ウオトキンの視線の意味に気づき、しどろもどろになりながらもなんとか誤魔化すアリシア。そんな彼女の様子はウオトキンに隠し事をしてしていると教えているようなものだったが、彼は深く突っ込まないようにした。

「そうか……子供みたいなことを考えていたんだな」

「失敬ね、私は今年の夏休みを使ってはるかに強くなる予定なのよ？ その計画を立てて何がいけないの？」

「へえ、もしよかったら聞かせてくれないかな。その計画ってやつを」

「いやよ。自分で探しなさい」

「それは厳しい」

優雅に笑うウオトキン。だがその頭の中はある事実気がついていた。

彼女は何かコツ、もしくは新しい技でも手に入れたのではという事実。

それは“計画”は組み立てるものであって、“探す”ものではないという単純なミスだった。

そんな単純なことに気がつかないほど彼女は慌てていたの、彼女が隠している秘密について詳しく知りたかったがウオトキンは深く聞かないことにした。いずれ彼女が語るだろうと、そう信じて。

## 10・夏休み、各々の過ごし方（前書き）

更新遅れて本当にすいません……夏休みが忙しいってどういこう  
となの……

あと絶賛スランプ突入中です。

## 10・夏休み、各々の過ごし方

「……ん？ もう朝か」

夏休み、それは希望の日々。普段の学業から解き放たれた学生達は各々自由な時間を過ごしていることだろう。それか、夏休み明けの魔闘祭に向けてなにかしらの訓練をしているのだろう。

だが、それは一般の生徒の話である。

一般の生徒ではない、セラフィーナ・ダンロップこと、セフィーは徹夜で本を読んでいた。

「やはり、本は良いものだ。五流ユウが書いたとは思えないくらい素晴らしい」

そう言って、背伸びをしながら持っていた本をベッドの上に放り投げる。その本の背表紙には「アルフェンスの英雄譚」と書かれている。この本、悪の魔王を倒すために1人の青年が旅をするという至極単純なものだが、途中で裏切りや騙し合いなど様々な策略が重なって、現在26巻になろうというのに、魔王直属の配下である四天王のそのまた直属の配下である十六騎士すら出てこないというえげつなさ。現在はコアなファンしか読まないというB級小説であり、セフィーもそのコアなファンの1人だった。

「ふむ……、今日もやることはないか」

「あ、セフィー？ やることないんだったらやってほしいものがあるんだけど」

そう言いながら扉を開けたのは国王レオナルド。妹がイケメン

で有名なギルドランクXと一緒にいると知っても特には焦っていない。妹を信頼しているといえはそこまでののだが。

「ノックぐらいしろ。仮にも乙女の部屋だぞ」

「乙女ねえ……」

「なにニヤニヤしてんだ殴るぞ」

はあ、と思わずため息をつくセフィー。こいつは私をなんだと思っっているのか。別に女の子らしく扱えとは言わないが……。などという明らかに矛盾に満ちた考えをしているセフィーの机の前にレオナルドは薄目の資料を放り投げる。それを手に取り、パラパラと目を通していくうちに、セフィーの顔つきが険しくなる。

「またこんなくだらないうものを……」

「別にいいだろう？ 暇なんだから」

文句を言うセフィーにニコニコしながら話を続けるレオナルド。どうやら、彼女の夏休みは仕事漬けになりそうだ。

「つつ……！」

アリシアは自身の指先から発せられた痛み思わず小さな悲鳴を上げた。すると、彼女が展開していたいくつもの火の玉はあっさりと消えてしまう。

「参ったな……」

彼女が見つけた新しい可能性が実現するのは、予想以上に厳しいようだ。それだけじゃなく、様々な可能性を見つけてしまった以上、それを極めてみたいのも現実。ぶっちゃけ、時間が足りなかった。

「ふう……どうしようかな」

ため息をつきながら、近くに置いてあったノートをめくる。そこには彼女なりの考えが記されてあった。

その内容は簡単に言えばコントロールを極めること。コントロールを極めれば、相手の障壁系ウォールの上を越えてダメージを与えられる。たとえ、回避しても追尾することができる。そうすれば、少ない消費で確実な成果を上げられるのではないか。アリシアはそう考えたのだ。

だが、それだけではなく、コントロールを極めれば、様々な恩恵が与えられることが分かってきたのだ。いわば、自分一人だけの玩具箱。欲が出てくるといふものだ。

「……よしっ！」

ノートを閉じて、再び決意を新たにするアリシア。今は彼女

の努力が実を結ぶことを祈ろう。

「いいか……ここはこうして……」

イケメン、ニール・グレイヴスは美少女たちに様々な技術を教えていた。時々ボディタッチとかしていた。爆ぜろ。

「のう、ニール。主に聞きたいことがあるのじゃが」「ん？ なんだ？」

イザドラの質問に懇切丁寧に答えるニール。その様子を羨ましそうに見つめるリリー。そんなリア充な彼の夏は過ぎていく。

「なんだよ……俺たちもいるっていうのに……」「まったたく……これだからイケメンは……」

そんな3人のそばで2人の少年、リッキーとフレッドが恨みましげに睨んでいるのを他の3人は知らない。いや、イザドラは気づいていたがあえて無視した。

## 10・夏休み、各々の過ごし方（後書き）

来週の更新は無理そう。 回生企画に10日近くとられるってことで  
ういっことなの……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3681t/>

---

魔王王と一緒

2011年10月4日17時49分発行